

箱根湯本早雲寺の開山以天宗清と鎌倉五山建長寺

家永遵嗣

箱根湯本の早雲寺は、小田原北条氏初代伊勢早雲庵〔天岳宗瑞〕の菩提所である。大徳寺出身の以天宗清を開基として、宗瑞の嗣子伊勢〔北条〕氏綱が開いた。以天の師東海宗朝の師陽峰宗韶が開いた大徳寺の塔頭龍泉庵に因んで、この学統を「龍泉派〔関東龍泉派〕⁽¹⁾」という。

二〇二一年に、神奈川県立歴史博物館が展示『開基五百年記念 早雲寺―戦国大名北条氏の遺産と系譜―』〔二〇一二月〕を催された⁽²⁾。縁あってこれに関連する連続講義のひとつを分担させていただき、早雲寺開山の以天宗清が小田原北条氏と鎌倉五山、とりわけ建長寺との接点になったことを述べた。その後の調査の結果を加えて敷衍したい。永正一六〔一五一九〕年八月に宗瑞が没し、同年九月に子息氏綱がその私邸で無遮会を行った。このとき、鎌倉五山文学の大家で建長寺住持を務めた経歴もある玉隠英瑠が願文を呈した⁽³⁾。宗瑞が建仁寺で学び、南浦紹明の教えを重んじたと記している。宗瑞の京都伊勢氏出自説の根拠資料として知られる。

問題は、「宗瑞が南浦紹明を重んじた」といって玉隠が賞賛したということの意味にある。

円通大応国師南浦紹明は建長寺開山蘭溪道隆の弟子だが、渡宋して虚堂智愚の教えをうけ、五山派と区別される所

謂「林下の禅」、大徳寺・妙心寺などの祖となつた。⁽⁴⁾宗瑞は在京していた時期に大徳寺春浦宗熙に参禅した。宗瑞と大徳寺との関係は当時よく知られていたはずだが、玉隠は大徳寺には触れずに、宗瑞が南浦紹明を重んじたという。南浦紹明は五山派の正統とは少し異なる立場にあつたので、玉隠の表現には微妙な問題がある。

この問題に関係があるのではないか、と思われる事実として、永正元年（一五〇四年）に南浦紹明の塔所であつた建長寺天源庵が焼失していたということがある。⁽⁵⁾これを知つた大徳寺の僧徒が再建を支援しようとしていた。永正六年には大徳寺一休宗純と縁の深かつた柴屋軒宗長が尽力し、後に早雲寺の開山以天宗清が、恐らく伊勢氏綱の援助を得て再興した。⁽⁶⁾玉隠が述べた「宗瑞が南浦紹明を重んじた」という言葉は、この天源庵の再興に関係しているのではなからうか。宗瑞は以天を介して大徳寺僧衆が天源庵の再興に腐心していることを知り、生前に奉加する意思を表明していた。玉隠は、これを踏まえて、宗瑞は建長寺僧としての南浦紹明を尊重した建長寺の外護者であると賞賛したのではないか、と推測できる。このことは、建長寺が氏綱に接近する契機になつたのだろうと思われる。

宗瑞・氏綱が三浦道寸を滅ぼして鎌倉を含む相模全域を支配するようになったのは、宗瑞死没の三年前、永正一三（一五一六）年七月のことだつた。⁽⁷⁾宗瑞が没した時期には、鎌倉五山との関係を深めることが領国経営上の焦点だつた。鎌倉五山や鶴岡八幡宮はがんらいは鎌倉公方と深い関係にあり、鎌倉公方の系譜をひく古河公方家は大有初年まで宗瑞・氏綱に敵対していた。ここに建長寺天源庵の再建問題を位置づけることができる。

鶴岡八幡宮寺供僧の日記『快元僧都記』天文四（一五三五）年八月二日条は、古河公方も関東管領も寺社（鎌倉五山や鶴岡八幡宮寺）の保護・修造に力を及ぼせなくなっていると批判し、氏綱が亡父宗瑞の遺志を継いで伊豆山・三島社・箱根社・早雲寺および鶴岡八幡宮を修造したことを賞賛している。同記天文四年九月二三日条には、⁽⁸⁾建長寺・⁽⁹⁾円覚寺の僧侶が鶴岡八幡宮で氏綱の戦勝を祈願する記事がある。氏綱と鎌倉五山とは強く結びつくに至っている。宗

瑞没後の無遮会は、鎌倉の宗教勢力を味方につける動きの最初の成果にあたるようだ。

さて、宗瑞は死没直前まで伊豆国韭山にて「韭山殿」と呼ばれていた⁽¹⁰⁾。以天は京都から下向していったん韭山城と下山木郷の香山寺に入った⁽¹¹⁾。宗瑞の墓所を早雲寺に置くことは、領国支配の中心地を韭山から小田原に移転する問題と関わっていたのである。近年、明応年間（一四九二—一五〇一）に相模トラフを震源とする大地震があったことが分かっていた⁽¹²⁾。相模トラフは小田原と非常に近く、これを震源とする大地震は小田原に激甚な被害をもたらす。小田原への本拠地移転や寺社修造には、この震災の影響も関わっていただろうと推測できる。

第一章 伊勢宗瑞・氏綱と建長寺との結びつき

【宗瑞没後の無遮会と鎌倉建長寺】

永正一六（二五一九）年八月一日に早雲庵宗瑞（天岳宗瑞）、いわゆる北条早雲が没した⁽¹³⁾。同年九月一日、子息伊勢（北条）氏綱の「私第」で宗瑞「早雲庵主天岳之霊」を祀る「無遮会」が行われた。鎌倉五山の僧を招いていることから、この氏綱の「私第」は小田原にあったのではないかとも思われる。「無遮会」とは貴賤・聖俗を分け隔てなく招いて行う法会だという。氏綱は大徳寺派に限らず高僧を招いたようだ。「施主」氏綱に替わって鎌倉五山の指導的な僧侶である玉隠が願文を作った。願文を著した玉隠英瑛は五山文学の大家で、禅興寺明月院に住した。建長寺住持を務めたこともある⁽¹⁴⁾という。宗瑞が初めて鎌倉に進攻したのは永正九年秋で、支配が安定したのは永正一三年七月頃だったから、まだ間もない。この願文は、宗瑞らと鎌倉五山との接近を示す、ごく初期の徴証だと思われる。

史料一『佳境集』「玉隠和尚語録」⁽¹⁵⁾

永正己卯秋季月（九月）之望（二五日）、大施主某甲就于私第、開無遮会請四來高賓、埜柄臨此筵、幸哉、代施主作文、以祭早雲庵主天岳之靈、其文内

須弥南畔曰、瞻部洲、日本東裔、有豆・相州、故賢太守、其人焉廋、天下英物、君子好速、譜系盛矣、業績箕裘、官爵至矣、名躍金甌、德超萬古、勢被六幽、樽折斤衝、帷幄運籌、麾三軍則、飛龍武侯、齊万物則、化蝶莊周、外収汗馬、内牧心牛、出入相府、東山優游、參得祖意、南浦宗猷、〔下略〕

願文には、伊豆・相模の太守であった亡き伊勢宗瑞が、優れた人物であったことを記す。

傍線を付した「外収汗馬、内牧心牛、出入相府、東山優游、參得祖意、南浦宗猷」の部分が問題である。外には戦を鎮め、内には心を養い、「相府」すなわち將軍〔足利義尚〕の政庁に出入りし、「東山」建仁寺に学んで、「祖意」宗祖蘭溪道隆の考えを理解し、南浦紹明（蘭溪の高弟）の教えを「猷」〔おもう〕人だった、という。

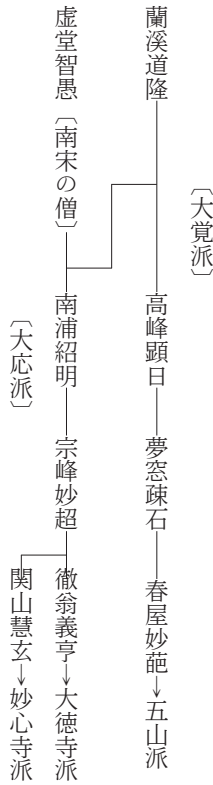
「相府」については奥野高広が解明した⁽¹⁶⁾。五山文学では將軍を「相公」と呼び、「相府」を「將軍〔相公〕の政庁」の意味で用いる。この文言は、宗瑞（伊勢盛時）が足利義尚の「相府」室町殿に出仕していたことを記すものだとされた。史料一は、宗瑞の京都伊勢氏出自説の根拠の一つとして有名になった。

「東山優游」とある「東山」は京都建仁寺の山号である。宗瑞が京都五山建仁寺で修行した経歴を指すと理解されている。とはいえ、宗瑞が建仁寺に参禅したことを裏付ける確実な史料はない。以天宗清は建仁寺にいたときに大徳寺東海宗朝の令名を聞いて大徳寺派に転じたという。宗瑞にも似たようなことがあったのかもしれない。

重要な問題は、「南浦宗猷」つまり宗瑞が南浦紹明の教説を尊重したという文言にある。南浦は五山派のなかでは特異な位置にあったので、この四字には何か特別な背景事情があるのではないかと思われる。

大覚禪師蘭溪道隆は建長寺を開き、弟子の高峰顕日を介して夢窓疎石・春屋妙葩にその教えが継承された⁽¹⁷⁾。これを大覚派といひ五山派の主流とされる。史料一を作文した玉隠は禅興寺開山としての蘭溪道隆から無及徳詮に引き継がれた教えを継いだという⁽¹⁸⁾。さて、南浦紹明は蘭溪に師事した僧侶で建長寺一二世住持を務めた、その意味では建長寺派の僧侶だ⁽¹⁹⁾。玉隠は「參得祖意」という言葉で、宗瑞が蘭溪道隆の教えを汲むということを述べたようだ。

〔建長寺開山〕



鎌倉時代の僧侶南浦紹明は駿河の人である。嘉禎元（一二三五）年に生まれ、建長寺の蘭溪道隆に参禅し、正元元（一二五九）年に渡宋して虚堂智愚の法を受け、文永四（一二六七）年に帰国したという。南浦紹明は帰国して建長寺に蘭溪道隆を訪ねたあと、文永七年から嘉元三（一二三〇五）年にかけて博多崇福寺などで若い禅僧を指導して名声をはせたという。徳治二（一二三〇七）年に建長寺一二世として入寺し、翌年、建長寺で没した。

南浦の弟子の柏庵宗意が南浦の塔所として建長寺天源庵を開き、可翁宗然が建仁寺天潤庵を開き、通翁鏡圓が南禅

寺正眼院を開いたといふ⁽²⁰⁾。ここまでは五山派に属する。南浦の弟子の宗峰妙超は後醍醐天皇らの帰依を得て大徳寺を開き、徹翁義亨が引き継いだといふ。宗峰の弟子の関山慧玄が花園上皇の帰依を得て妙心寺を開いたといふ⁽²¹⁾。

一五世紀、大徳寺派・妙心寺派は、五山派とは別の「林下（山隣）の禪」という立場を確立していた。一五世紀後半の大徳寺派の名僧一休宗純の『狂雲集』⁽²²⁾は、南浦紹明を南宋の僧侶虚堂智愚の法を日本にもたらした人だと記す。「賛大応国師」⁽²³⁾には「禪老〔南浦〕如無渡東海、扶桑国裏昏昏々」とある。南浦が渡海して虚堂の禪を伝えなかったならば、「扶桑」（日本）は暗黒のままだったといふ。一休は「賛虚堂和尚」⁽²⁴⁾と題して、虚堂が型にはまった禅風にとらわれなかったと称揚する。一休は蘭溪道隆については述べていない。このようにみると、大徳寺派は虚堂智愚から南浦紹明へうけ継がれた学統を重視したらしい。蘭溪道隆からの法脈を重視する五山派との差異にあたるようだ。

もしも史料一が一休の文章であったのだとすると「参得祖意」の「祖」とは虚堂智愚にあたるのだろう。これに対して、実際に史料一を著わした五山派の玉隠は、宗瑞が南浦を介して蘭溪道隆の教えを汲んだと述べたのだろう。

後述するように、宗瑞は駿河下向後に相国寺から五山派の黙堂寿昭を招いて指導を受けていた。黙堂は円覚寺の座公文を得ていたが、玉隠は宗瑞と黙堂との関係を語らない。宗瑞と大徳寺との縁は当時よく知られていたと思われるが、玉隠は五山派の建仁寺との関係を述べるだけで大徳寺との縁を記さずに、宗瑞が南浦を重んじたとする。この少し前に南浦紹明の塔所である建長寺天源庵が焼失し、再興が問題になっていた事実に関係があるらしい。

【建長寺天源庵の回祿と再興】

建長寺天源庵は南浦紹明の没後に開かれた塔所だが、宗瑞の時代には南浦紹明の終焉の地だと認識されていた。永正元（一五〇四）年に焼失し、柴屋軒宗長や早雲寺以天宗清らが再建に貢献した。その背景には南浦紹明を派祖と仰

ぐ大徳寺僧衆の働きかけがあった。

史料二『東路の津登』柴屋軒宗長⁽²⁵⁾

〔前略〕建長寺天源庵は横山嶽〔筑前国博多崇福寺〕の開山大応国師〔南浦紹明〕遷化の旧跡也、いぬる五とせばかりのさきのとし〔永正元・一五〇四年〕、回禄〔炎上〕す、庵領なども久しく知行して〔ママ・不知行して〕、

およそなきが如くなり、紫野大徳寺衆中、たびたび申くださるといへども、とかくことゆかず〔中略〕

〔宗長が相模守護扇谷上杉朝良に訴えて〕天源庵領二箇所かへしつけらる〔中略〕今月〔十二月〕五日、天源庵にたちよりて侍し、修理のこと、申あはせなどする〔下略〕

柴屋軒宗長は白河の関を見るために永正六年七月に駿河国丸子を発った。戦乱のため白河には辿りつけなかったが、帰途一〇月に江戸城で相模守護扇谷上杉朝良に会い、天源庵領二箇所の返付を実現した。一二月に天源庵で修理の打合せをしたという。翌年から相模の風雲が急を告げたので、工事の始末は不明だ。

宗長によれば、建長寺天源庵は南浦紹明「遷化の旧跡」と考えられていたという。「いぬる五とせばかりのさきのとし」永正元〔一五〇四〕年に炎上焼失したという。永正元年の頃、宗瑞は扇谷上杉朝良と提携して関東管領山内上杉顯定と戦っていた。宗瑞が朝良に与して武蔵に出兵したことはあるが、宗瑞が建長寺など鎌倉周辺の寺社に支配を及ぼす状態にはなかった。永正六年もほぼ同断で、宗長は相模守護扇谷上杉朝良に働きかけたのである。

宗長は建長寺天源庵の再興・修造について、「紫野大徳寺衆中」から尽力を求められていた。「たびたび申くださる」とある。派祖南浦紹明の旧跡だったために大徳寺僧衆が天源庵の再興に腐心していたようだ。宗瑞・氏綱がこの

問題に関与し始めるのは、宗瑞らが鎌倉周辺に侵攻した永正九（一五一二）年秋よりも後のことかと思われる。

天源庵の再興が実現した年を何年だと特定できる史料はないが、南浦紹明の教えを汲む妙心寺に関係する史料から、箱根早雲寺開山の以天宗清が奔走して実現したことが分かる。

史料三『明叔録』⁽²⁶⁾

宿房天源庵、大応国師塔頭也、昭堂額、普光、即国師入定地也、早雲寺以天和尚再興、彼庵滞留二・三日、先金沢〔武蔵国六浦周辺〕一見〔下略〕

『明叔録』は一六世紀の妙心寺関係者の文章を集めた典籍で、史料三は妙心寺の僧侶東嶺智旺が天文二〇（一五五〇）年に小田原・鎌倉を訪問した際の記録の一部である。

東嶺智旺は建長寺天源庵に宿泊した。「大応国師」南浦紹明の塔頭だとい、「国師入定地」だとも記す。天文二〇年より前に再興された、その再興の年次は記していない。「早雲寺以天和尚再興」という部分が注目される。天源庵の再興は宗長の段階では完了していなかったらしい。「早雲寺以天和尚」の貢献で実現した。後述するように、以天の東国下向は永正一三年冬から宗瑞が没する少し前までの間の時期とみられる。前掲史料一の時期には早雲寺開創に向けて奔走していただろう。天源庵の再興に関わるようになったのも、同じ頃だったと思われる。

既述の通り、大徳寺衆僧は永正六年よりも以前から建長寺天源庵の再興に強い関心を寄せていた。大徳寺から招かれた以天宗清が建長寺天源庵を再興することは、大徳寺衆僧の意向にかなっていたことだろう。以天の勤めで宗瑞が生前に建長寺天源庵の再興に奉加する意向を示し、建長寺側の立場にある玉隠が、宗瑞は建長寺の僧南浦紹明を尊重

した人だといって賞賛する願文を作った、という関係ではなかったのか、と思われる。

第二章 宗瑞と曹洞宗・臨済宗五山派・臨済宗大徳寺派との関係

伊勢宗瑞は、生涯にわたって複数の禅宗教派、曹洞宗・臨済宗五山派・臨済宗大徳寺派との関係を続けた。宗瑞の宗教遍歴を踏まえて宗瑞と以天宗清との関係を位置づけたい。

【伊豆修禅寺に繋がる曹洞禅との関係】

父の伊勢盛定が曹洞宗に傾倒していたため、宗瑞やその姉妹の「北川殿」、「北川殿」の子の今川氏親は、曹洞宗との関係が深かった。信憑性に難があるが、『管領鎌倉九代記』⁽²⁷⁾は、宗瑞の遺骸は曹洞宗の伊豆修禅寺で荼毘に付されたあと、箱根湯本早雲寺に葬られたとする。宗瑞が臨済禅に転じる契機は、義兄今川義忠の戦没にあるようだ。

宗瑞らは、曹洞宗のなかでも遠江石雲院（静岡県榛原町坂口）を開いた崇芝性岱⁽²⁸⁾の門派と縁が深い。崇芝は遠江の人だが、喜山性讚に連れられて応永末年に備中国草壁荘（岡山県小田郡矢掛町横谷）の洞松寺にゆき、洞松寺で喜山に学んだ⁽²⁹⁾。他方で、宗瑞の父伊勢盛定は永享二（一四三〇）年に曹洞宗の僧古潤仁泉を招いて備中国荏原荘（岡山県井原市西江原町長谷）に法泉寺を建立した⁽³⁰⁾。洞松寺と法泉寺とは距離が近く、喜山と古潤は共に加賀仏陀寺太原宗真の流れを汲む。両寺の間に交流があったために、崇芝と盛定とが結びついたようだ。

盛定の女「北川殿」は駿河今川義忠に嫁したあと、崇芝の弟子たちと深く関わった。

崇芝の弟子賢仲繁哲はもと「備中平氏」⁽³¹⁾の出自で、崇芝が備中洞松寺にいた時に出家して弟子となり、崇芝と共に

康正元（一四五五）年に遠江に来て石雲院の開創に従った。文明三（一四七一）年に駿河国益津莊小河（焼津市）の有徳人「法栄長者」の求めで小河に林叟院を開いた。文明六年に崇芝を継いで石雲院住持になった。文明八年に今川義忠が戦死した後の後継者争いに際して、「法栄長者」は「北川殿」と今川氏親を匿った⁽³²⁾。賢仲は「法栄長者」と「北川殿」とを結びつけた人のようだ。この他に、崇芝の弟子には、家督相続を許された今川氏親の求めで文明二二一年に義忠の菩提所増善寺を開いた、辰応性寅もいる⁽³³⁾。

崇芝の弟子の隆溪繁紹は伊豆「北条」（葦山城近く）の出身で、大徳寺で一休宗純に学び、後に崇芝の弟子になったという。「豆州太守」宗瑞が招いて「明応八年」に伊豆の「修善古刹」を曹洞宗に改めて修禅寺とし、これに住したという⁽³⁴⁾。宗瑞は明応八（一四九九）年三月に「修禅寺東陽院」に寄進状・禁制を授けており、関係する史料であろうと思われる⁽³⁵⁾。隆溪は大徳寺との縁、伊豆北条との地縁から、宗瑞との縁が深かったが、宗瑞よりも早く永正元年に五六歳で没した。記述の通り『管領鎌倉九代記』は、宗瑞の遺骸を修禅寺で荼毘に付したと伝える。

さて、崇芝性岱を庇護して遠江石雲院を外護したのは地元の豪族で幕府奉公衆でもあった勝間田氏である。『日本洞上聯燈録』には、康正元（一四五五）年に崇芝が石雲院を開いたとき、「郡将葛股氏（勝間田氏）」が田地を寄進したとある⁽³⁶⁾。『蜷川親元日記』寛正六（一四六五）年一〇月二四日条に、遠江の武士「勝田（勝間田）修理亮」「横地鶴寿」が宗瑞の父伊勢盛定を介して足利義政の指揮を受けていたことがみえる。盛定は崇芝を介して勝間田氏と結びついていたのかもしれない。

文明八（一四七六）年に宗瑞の義兄今川義忠が戦死した⁽³⁷⁾。勝間田氏・横地氏が足利義政の命令で義忠と戦い敗死させたのである。義忠が東軍の遠江守護斯波義寛の守護代を討ち取ったからだ⁽³⁸⁾。宗瑞の従兄弟にあたる政所執事伊勢貞宗が母方の叔父甲斐敏光を西軍から引き抜いて斯波義寛の守護代にし、派遣した⁽³⁹⁾。義忠の討滅は幕府中枢部の意

向だった。斯波義寛は領国三カ国のうち、越前を朝倉氏に奪われ、尾張を西軍斯波義廉に抑えられていた。遠江を失うと領国がなくなる状態だった。足利義政は東軍斯波氏の存続を望んだようだ。父盛定から連絡役を引き継いでいた宗瑞〔出家前の伊勢盛時〕は、いやいやながら勝間田氏らに義政の命令を伝えて、義忠を討たせたとみられる。

宗瑞は曹洞宗の人脈に深く関わっていたことから、義兄の今川義忠を死に追いやる仕事を背負い込まされた。この経験が宗教的な回心の契機になったのではないかと思われる。

【大徳寺春浦宗熙への参禅】

宗瑞が大徳寺から以天宗清を招く前提は、宗瑞が大徳寺春浦宗熙⁽⁴⁰⁾に参禅したことだ。そこから、春浦宗熙の流れを汲む東溪宗牧や以天宗清らとの交際へと繋がっていった。

今川義忠の死を契機として大徳寺派臨濟禅に転じた人として、連歌師の柴屋軒宗長⁽⁴¹⁾があった。宗長は駿河国建穂寺（建穂神社）で得度し、醍醐寺系の密教を学んだ人だという。今川義忠に仕え、義忠の没後、大徳寺一休宗純に参禅し、のちには一休ゆかりの酬恩庵のある山城国薪に居した。参禅時期は義忠が没した文明八（一四七六）年二月頃から一休の没した文明一三（一四八一）年一月までの間とみられる。しかしながら、ここで、宗瑞が参禅した春浦宗熙の師匠養叟宗頤は一休宗純の兄弟子で、一休は養叟と激しく対立したことで知られる。同じく大徳寺の禅に傾倒したとはいっても、宗長と宗瑞とは異なる潮流に棹さしていたようだ。

ここにおいて、宗瑞の舅小笠原政清が春浦宗熙に帰依していたという事実⁽⁴²⁾が注目される。小笠原政清は足利義尚の弓馬師範で、文明五（一四七三）年に義尚の「弓始」の儀に弓馬師範として奉仕し、延徳三（一四九一）年には將軍足利義材のために「弓馬之道」を伝授した。

宗瑞（盛時）は文明一八年以前に政清の婿になった。子息の氏綱は、宗瑞と小笠原備前守政清の女子との間に、文明一九（長享元・一四八七）年に生まれているからである。『小田原編年録』第一冊所収の北条系図の氏綱の項に「母ハ小笠原備前守女、長享元年出生」とある。

宗瑞（盛時）は文明一五年一〇月に足利義尚の申次となり、文明一九（長享元）年四月まで在勤する⁽⁴⁴⁾。義尚の側近宗瑞（盛時）と義尚の弓馬師範小笠原政清の女子との結婚ということになる。盛時（宗瑞）は政所執事伊勢貞宗の従兄弟だから、これは、名門家族同士の婚姻だった。

『小田原編年録』は二次史料だが、政清の実子「六郎」の子元統（氏綱の従兄弟）について、氏綱と親しい関係だったことを示す一次史料がある。小笠原元統は大永年間まで奉公衆として在京したようだ。大永七（一五二七）年に近江に逃れた細川高国が北条長綱（氏綱弟・幻庵宗哲）に宛てた書状に「猶小笠原兵部（元統）可有演説⁽⁴⁵⁾候」とあり、小田原に下ったことがわかる。その後、小田原に留まって氏綱に仕え、伊勢貞孝が天文五（一五三六）年頃に幕府政所執事になったあと、貞孝の家宰蜷川親俊に宛てた氏綱書状に副状を付すようになる⁽⁴⁶⁾。

二木謙一氏が小笠原政清と春浦宗熙との関係について指摘しておられる。春浦宗熙の『春浦録』に収める「小笠原大中元公居士尽七日」法語に「孝子政清」の依頼をうけた旨の記述がある⁽⁴⁸⁾。「大中」の法名は持清の法名である⁽⁴⁹⁾。寛正六（一四六五）年、政清の父持清の葬儀において、政清の依頼で春浦が導師を務めたことがわかる。舅である政清が春浦宗熙に帰依していたために、婿の宗瑞が春浦に巡り会ったのだろうと推定される。

【五山派の黙堂寿昭・大徳寺派の東溪宗牧らとの接触】

宗瑞は春浦宗熙に併行して曹洞宗や五山派の臨濟禅とも関わっている。後述するように、宗瑞の禅理解は表面的な

ものではなかったとみられるので、宗瑞自身に探求の動機があって何人かの師匠に指導を求めるところに、とりわけて大徳寺との関係が深くなったと考えられる。春浦宗熙との関係は文明一八年前後に始まり、長享元（文明一九）年に宗瑞が駿河に下向したあと明応五（一四九六）年に春浦が没するまで続いたようだ。明応三年に初見する「宗瑞」の法諱⁵¹は大徳寺系とみられる。春浦に授けてもらったものではないかと考えられる。

この間の延徳二（一四九〇）年七月に、五山派の指導者だった瑞溪周鳳の側近相国寺慶雲院院主黙堂寿昭が宗瑞に招かれて駿河に下向した⁵²。明応元（一四九二）年八月には「駿州大富山善得寺」にいたといい、景徐周麟の『翰林葫蘆集』には、駿河に招く人がいたために下向したとある。善得寺（現在廃寺、静岡県富士市今泉の善徳寺公園）は宗瑞の所領と伝える「富士下方」の内にいる。宗瑞がいたと伝える興国寺は善得寺の「末寺」であった。黙堂寿昭を駿河に招いたのは出家前の伊勢盛時（宗瑞）だったと思われる。

『北野社家日記』延徳三年八月一〇日条に、將軍足利義植の申次伊勢貞遠が駿河にいる「伊勢新九郎」盛時と自分とは「同名」だと述べた記事がある。この頃、宗瑞は在俗であった。同年七月一日に足利茶々丸が継母である足利政知後室円満院殿武者小路氏（義澄生母）を殺害⁵³し、明応二（一四九三）年に宗瑞が茶々丸を攻撃し始めた⁵⁴。盛時（宗瑞）を庵号「早雲」で呼ぶ初見史料は『松堂高盛禪師語録』明応三（一四九四）年八月記である⁵⁵。「宗瑞」の法諱は同年一月一七日付の古河公方足利政氏書状に初出する。「宗瑞」の法諱は大徳寺系である。明応二、三年頃に春浦宗熙から「宗瑞」の法諱を授けられたとみて良いのだとすると、春浦との交際は五山派の黙堂寿昭との交際に併行して続いていたということになる。

黙堂寿昭は明応元年五月に鎌倉円覚寺の公文を得ており⁵⁷、宗瑞と鎌倉五山との接点になり得る人物だと思われる。しかし、史料一の玉隠の願文には黙堂の介在はみえない。永正五（一五〇八）年以降、東溪宗牧を介して再び宗瑞と

大徳寺との関係が強まった。

永正五年十一月、宗瑞と共に春浦宗熙に学んだ東溪宗牧が、宗瑞のことを「武士にして禅にゆく者」と称揚する文を記した。宗瑞の禅理解が深い、と考えられる所以である。

史料四「東溪宗牧語録」⁽⁵⁸⁾

東海路、有武而之禅人、諱曰宗瑞、自称早雲菴主、曾入正統大宗禅師〔春浦宗熙〕室而操吾三玄之戈、周一世之雄而仏法中人也、故傾誠於外護者、金湯未為險矣、弗克謏鷲嶺記別者歟、或人字之曰天山〔ママ・天岳〕、今茲冬便於飛□〔廉カ〕而、見求孫一偈於其下、嚴令難拒、因贅之云、

一劃纒形蒼蓋円、包容万有四時遷、孤峰頂上回頭看、日月星辰脚下辺

永正五仲冬日 前——（大徳東溪宗牧）迅毫

史料四には、宗瑞が春浦宗熙に学んだこと、ある人が宗瑞の法名を「天山〔実は天岳が正しい〕」と名付け、宗瑞が宗牧に「偈」を授けてくれと頼んできたため、永正五年一月に記した、とある。東溪宗牧は「筑前太宰府」⁽⁵⁹⁾の人で、文明一四（一四八二）年頃に春浦に参禅し、春浦宗熙の遺言で春浦の高弟実伝宗真の弟子になったという。春浦に参禅していた時期が宗瑞と重なるので、面識があったのではないかと思われる。「武而之禅人」という批評は「武士の立場で禅に心を向ける人」という意味で、宗瑞を真剣な仏教者だと賞賛しているようだ。

この史料四は、政治情勢の変化で永正五年に宗瑞と京都との交流が活発化したことを背景にしている。



永正五年は、五月にいわゆる「流れ公方」足利義植が京都に復帰した年で、七月に義植が今川氏親を遠江守護に補すなど宗瑞・氏親と京都との交流が活発化した年であった。細川政元は、文亀元（一五〇一）年半ば以降、斯波氏・山内上杉氏と結んで宗瑞や氏親に敵対していた。⁽⁶⁰⁾永正四年に政元が暗殺されたあと、細川京兆家の内部分裂が激化して將軍足利義澄が近江に逃れ、対立していた足利義植が帰京した。宗瑞らは永正三年頃に政元を見限って足利義植に通じていたので、義植の帰京後に宗瑞らと京都との交流が活発化したのである。

【東海宗朝の弟子以天宗清を招請】

『延寶伝燈録卷第三十二』東海宗朝の項には、⁽⁶¹⁾以天宗清の師である東海宗朝と前述した東溪宗牧との間の作詩に関するやりとりがみえ、二人が懇意であったことが窺われる。宗瑞からの要請を受けた東溪の仲立ちで東海宗朝の弟子以天宗清の伊豆下向が決まったのだらうと思われる。

正宗大隆禪師以天宗清の伝記『大隆禪師行実』には、宗瑞らが以天を招請するまでの事情がみえる。

史料五『大隆禪師行実』⁽⁶²⁾

特賜正宗大隆禪師以天和尚行実

箱根湯本早雲寺の開山以天宗清と鎌倉五山建長寺（家永）

師（以天宗清）諱宗清、平安城之人也、母一夕夢、有一僧來、持鉢、奴婢不顧、母自以盆米施焉（中略）覺後有妊、文明（壬辰）夏、天下大旱、及師生、甘雨沛然（中略）十七歲而入建仁、閱一大藏經、已欲半時、有三僧（偶）論諸山禪、但龍峰（龍寶山大德寺）之禪、尤為勝、特東海朝和尚門庭嚴峻而、學履無入戶者、師（聞之）心甚慕之、即（翌）日罷闍教往謁焉、偶逢東海出作札於門外、合爪而立、海便問（自）何處來、師曰、東山（建仁寺）、（中略）海察其志不凡、乃許入室、晨夕參究（中略）永正龍集（丙子）冬十一月、清首座（以天宗清）需贊因為之書、于時、北条氏茂公（ママ、伊勢宗瑞）治豆州・相州振威東閔、厚礼而請師、遂相（相州足柄郡創早雲禪刹、此地也、南有南屏聳、東早川□□流、北有小朶峰、西温湯涌出、自為衆浴室、故號金湯山、曳師為第一世、永正十六（己卯）〔ママ脱あるか〕、承勅出世于龍寶山上堂（以下、開堂法語を略す）

以天は「文明（壬辰）」、即ち文明四（一四七二）年の誕生で、一七歳のとき（長享二年）に建仁寺に学んでいて、東海宗朝の令名を聴いて憧れたという。あてもなく大徳寺に赴いて、たまたま東海宗朝に巡り会って参禪を許されたという。史料一によって宗瑞が建仁寺に学んだとすると、建仁寺で以天と出会っていたという可能性が考えられるが、確証はない。永正一三年から同一六年ころに宗瑞が以天を招聘した時の媒介者は、東溪宗牧（永正一四年四月一九日没）・東海宗朝（永正一五年一月二七日没）であつたらうと思われる。

問題は傍線部にある。「永正龍集（丙子）」とは永正一三年（丙子年）である。同年一月に大徳寺の修行僧であつた「清首座」以天宗清が師の東海宗朝から皆伝の贊を賜つた。以天が在京していたことがわかる。その後記される「北条氏茂公」伊勢宗瑞が「豆州・相州」を支配していて、以天を招いて早雲寺を開いたという事績は、「永正龍集（丙子）冬十一月」のことではなく、「曳師為第一世、永正十六（己卯）」にかかる文言だと思われる。以天の招聘は、

宗瑞が三浦道寸を滅ぼした永正一三年七月よりも後のことだった。宗瑞は「永正十六〔己卯〕」八月に没した。早雲寺の開創に関わる右の史料五のなかに宗瑞の死没記事がないのはおかしい。「永正十六〔己卯〕」という文言の後には、宗瑞の死没に関する文があったけれど、転写の過程で失われたとみられる。

「早雲寺記録⁶²」には、以天宗清の下向について次のようにある。宗瑞の「豆州葦山へ御隠居之節、以天和尚ヲ京都ヨリ御請待ニテ、豆州香山寺ニ暫ク居住、其後早雲公御逝去、御遺言ニテ、氏綱公当寺〔早雲寺〕御建立、以天和尚ヲ開山ト被レ成」たとある。「豆州葦山へ御隠居」とは、永正一五〜一六年頃に宗瑞が氏綱に家督を譲ったことを指すであろう。この頃に以天の下向が実現したが、早雲寺はまだなく、以天を葦山城下の山木にあった香山寺に入れ、同一六年八月一五日の宗瑞の死を迎えたと思しい。

伊豆長岡の宝成寺には、「寶成寺山林竹木」以下を「早雲寺殿御制札」のとおり安堵する永正一八〔大永元・一五二二〕年四月一二日伊勢氏綱制札の写しがある。早雲寺が既に開かれていたことを示す史料とみられる。

以天宗清の伝記を記す前掲史料五『大隆禪師行実』の記載では、永正一六年に以天が大徳寺住持になったようにみえる。しかし、永正一六年八月に伊勢宗瑞が没しているので、以天が同年中に上洛して大徳寺に止住していたとすると、以天は宗瑞の一周忌も三周忌も、下手をすると宗瑞没後の葬儀も勤めなかったことになってしまう。史料五の「永正十六〔己卯〕」と「承勅出世于龍寶山上堂」との間には何らかの脱文があると考えられる。

大徳寺の史書『龍寶山大徳禅寺世譜』『龍寶山志⁶³』は、以天の大徳寺住持就任初回を大永二〔一五二二〕年四月二一日だとする。『龍寶山志』には「出世開堂」とあり、『大隆禪師行実』には開堂法語が収められている。以天が大永二〔一五二二〕年に大徳寺第八三世になって入堂儀式を行ったという『龍寶山志』の記載を信用して良いように思われる。以天宗清は、早雲寺の基礎を形作ったあとに上洛したのだとみて良からう。

ここで、建長寺天源庵再興の年次を記す史料はないが、以天が大徳寺住持になる前か後かを考えてみると、上洛以前に着手したと考えるのが穏当だと思われる。大徳寺僧衆は永正六（一五〇九）年以前から天源庵の再興に腐心していた。相模に下った以天が再興に着手せず上洛して大徳寺の住持を務め、再度の下向のあとで再興に着手したとみるよりも、再興に着手したうえで上洛して大永二年に大徳寺住持になった、ということのほうが蓋然性がある。

氏綱は、宗瑞が志して果たせなかったという箱根神社宝殿の再興を大永三年に行った。⁽⁶⁶⁾史料一を宗瑞が生前に天源庵の再興を表明していた事実を背景にするものとみると、天源庵の再興は箱根神社宝殿の再興と並行して進められたのだろうという関係になる。いずれも、小田原に本拠を移す政略の一部だったようだ。

【葦山から小田原への本拠地の移転】

静岡県沼津市の妙海寺に伝わる永正一六（一五一九）年八月八日今川氏親諸役免除状には、妙海寺に対する諸公事を「葦山殿如御判」く「北川殿御末代」まで免除するとある。⁽⁶⁷⁾「葦山殿」は伊勢宗瑞、「北川殿」は氏親の生母（宗瑞の姉妹）を指す。宗瑞は同月一五日に没するので、彼は死の直前まで「葦山殿」と呼ばれていたことがわかる。宗瑞の本拠は葦山にあり、小田原は二代伊勢（北条）氏綱の本拠として新たに設定されたと推察される。以天宗清の招聘はこの戦略展開に関わっている問題だったと考えられる。

近年の考古学的研究により、明応年間（同四年ないし九年）に相模トラフを震源とする巨大地震があったという仮説が提起されている。根拠史料となる『勝山記』の信憑性と「上ノ午ノ年大地震（明応七年東南海地震）ニモ勝レ」ていたという地震の規模から、明応九（一五〇〇）年六月四日地震が該当すると思われる。相模トラフを震源とする同程度（マグニチュード八）規模の元禄地震（元禄一六（一七〇三）年一月二二日）・関東大震災（大正一二（一

九二二) 年九月一日」の被害に照らすと、小田原市街と箱根道・熱海道は壊滅的な被害を受けたとみられる。箱根道・熱海道の交通収益を失った小田原大森氏が本拠地を足柄峠方面(小山町域)に移す契機になったのだろうと考えられる。宗瑞・氏綱父子が小田原に本拠を移す事業は、壊滅的被害を受けた小田原市街が住民たちの力で復興する過程に、途中から宗瑞らが絡んでゆく関係としてあったのだろうと思われる。

箱根道は文亀二(一五〇二)年七月末には通行できるようになっていた。『宗祇終焉記』によれば、連歌師宗祇と弟子の宗長が国府津から箱根湯本を経て駿河に向かった。⁽⁶⁹⁾ただし、宗祇らは「小田原」に滞在することはなく、宗長は小田原市街の地名も、支配者の姿も記していない。

「宗長手記」によれば、永正元(一五〇四)年九月の立川原(立川市)の合戦に参加した今川氏親・伊勢宗瑞は、帰途、鎌倉に滞在し、熱海・韭山で湯治して帰国したという。しかし、宗長は熱海道の入り口にあたる小田原について、地名自体を記していない。⁽⁷⁰⁾箱根道・熱海道の入り口にあたる「小田原」は復興していなかったと思われる。

宗瑞と小田原との関係を示す史料は、永正七(一五二〇)年になって初めて現れる。

「秋田藩家蔵文書十」永正七年一〇月一九日三浦道寸書状には、「伊勢入道当国乱入」という事態が起こり、相模守護扇谷上杉朝良(建芳)が反撃して、「小田原城漚迄恣打散」⁽⁷¹⁾らしたとある。明応九(一五〇〇)年地震を想定すると、一〇年後になって漸く小田原が復興して、伊豆から相模に侵攻する宗瑞の出撃基地が置かれたと思われる。

このようなわけで、小田原を首府として伊豆・相模を支配する構想は、相模征服後のものだと思われる。宗瑞は永正九年八月に三浦道寸を攻めて岡崎城(平塚市岡崎)を奪い、道寸を三浦半島に追い込んだ。⁽⁷²⁾相模守護扇谷上杉朝良の拠点だった糟屋荘(伊勢原市上糟屋)も奪ったと考えられるが、戦乱には決着がついておらず、相模国に対する領国支配を確立するには、まだまだ遠い状況だった。

宗瑞は永正一三（一五一六）年に相模玉繩城（鎌倉市城廻）を完成して扇谷上杉勢の相模侵攻を遮った。⁽⁷³⁾同年七月一日に三浦道寸・義意父子を新井城（三浦市三崎町小網代）で滅ぼし、相模全体を征服した。⁽⁷⁴⁾このようにして、小田原が扇谷上杉朝良や三浦道寸に脅かされる状況を克服し、韭山から移転する条件が整ったと考えられる。

三浦道寸の滅亡は、領国拡張戦略の転機にもなっている。宗瑞と氏綱は戦略目標を上総・武蔵への侵攻に切り替えた。永正一三年一月に宗瑞は上総妙光寺（現在の藻原寺・千葉県茂原市茂原）に禁制を発給し、⁽⁷⁵⁾翌年秋にかけて侵攻した。⁽⁷⁶⁾宗瑞が氏綱に家督を譲ったあと、永正一六年七月に氏綱が発行した禁制が上総妙光寺に伝わる。⁽⁷⁷⁾武蔵への侵攻は、大永四年に江戸城を奪う頃に明瞭となる。

三浦道寸の滅亡は後北条領国と今川領国との分離の画期にもなった。宗瑞は甥の今川氏親に従って遠江・三河に出陣することが多かったが、永正一〇（一五一三）年三月までしか確認できない。三浦氏滅亡後の永正一四年冬から翌年にかけて、引間荘（浜松市）で氏親と斯波勢との決戦があった。宗瑞は上総に侵攻していたためか参戦していない。⁽⁷⁸⁾小田原を本拠として相模を領国支配するうえで重要だったのが、関東の首府鎌倉の支配だった。特に、古河公方との縁が深かった五山・鶴岡を味方につけることが必要だった。永正一二年二月に円覚寺の公事を免除した宗瑞・氏綱の判物があり、⁽⁷⁹⁾諸役免除は三浦氏滅亡以前から行われていたことが分かる。とはいえ、宗瑞が南浦紹明を尊重したという話は諸役免除からは出てこない。建長寺については、天源庵の再興が焦点だっただろうと思われる。

『快元僧都記』は鶴岡八幡宮の供僧快元の日記で、享祿五（天文元・一五三二）年から天文一一年にかけての記事が残り、氏綱の推進した鶴岡八幡宮再建事業に関する記事が詳しい。次の記事は、建長寺・円覚寺の僧衆が氏綱の為に戦勝祈願の祈禱を行ったというものだ。

史料六『快元僧都記』天文四（一五三五）年九月二三日条⁽⁸⁰⁾

廿三日、於鶴岳、敵〔扇谷上杉朝興〕退散為祈禱、建長・円覚両寺僧達十余人、大般若真読、於當社黒衣之僧達祈禱、前代未聞是始也云々、廿七日迄被読了

天文四年八月に北条（伊勢）氏綱が駿河今川氏輝と協調して甲斐に出兵し、その隙に「敵」扇谷上杉朝興が相模に侵攻して「中郡大磯・平塚・一宮、其外小和田・賀崎・鶴沼」を焼き払った⁽⁸¹⁾。この際に、建長・円覚両寺の僧が鶴岡八幡宮で「敵退散」を祈ったとある。鶴岡の供僧ではなく「建長・円覚両寺」の僧侶が、鶴岡八幡宮で氏綱のために「敵退散」を祈ったということが注目される。「建長・円覚両寺」は氏綱の与党になっていたようだ。

快元は『快元僧都記』天文四年八月二日条⁽⁸²⁾で氏綱の寺社修造事業を賞賛している。古河公方も関東管領も寺社の保護・修造に配慮できなくなっていると批判したうえで、「氏綱、伊豆・三島・管根之建立、先忘親（ママ・亡親）（早雲）之寺、剩関東之宗廟當社（鶴岡八幡宮）、如此建立、希代之奇特耳、〔中略〕、定利生吉事可有之」と記す。古河公方も関東管領もたよりにならない状況のなかで、氏綱は熱海伊豆山神社・三島大社・箱根神社・鶴岡八幡宮および早雲寺の修造で善根を積んでおり、吉事が期待されるという。

『快元僧都記』天文七年一〇月一五日条⁽⁸³⁾には、同月七日の国府台合戦で小弓御所足利義明らが氏綱に敗れて戦没した事情について、「年来氏綱造宮不怠」るがゆえであると、「八ヶ国之可為大將軍事无疑」とする。寺社修造を支配者としての資格に関わる責務だとし、氏綱は関東を統べる「大將軍」になること疑いなしという。鶴岡八幡宮寺の供僧快元が氏綱を賞賛する理由は鶴岡八幡宮の修造事業にある。快元は建長寺天源庵の修造には言及していないが、天源庵の再興は建長寺僧衆が氏綱の与党になる契機だったとして相応しいだろう。

さて、箱根神社は小田原の領主である。同社所蔵の永正一六（一五一九）年四月二八日伊勢宗瑞讓状⁽⁸⁴⁾には「四百くわん文 おたはら」「六くわん文（同（小田原）宿のちしせん（地子銭）」などを「はこねりやう〔箱根領〕所々」の一部として宗瑞の子菊寿丸（伊勢長綱・幻庵宗哲）に譲る旨がある。宗瑞が小田原に対する支配権を取得した時期と事情が不明だが、宗瑞はこのとき箱根神社の神職ではなかったから、箱根神社領の地頭ないし領家箱根神社の所務代官として小田原を支配したとみて良いようだ。箱根神社の修造は、宗瑞らが小田原などの「はこねりやう〔箱根領〕」から収税する権限に対応する、社会的な責務として果たされたのだろう。

大永三（一五二三）年の箱根神社造営棟札⁽⁸⁵⁾には、伊勢氏綱が宗瑞の遺志を継いで同社の修造を行ったとある。小田原を領国支配の中心にすること、箱根神社を修造することとは権利・義務関係にあった。これに対して、建長寺天源庵の再興は、鎌倉五山を従える領国統治に関わる社会的責務であったのだろうと解される。

【おわりに】

建長寺天源庵が永正元（一五〇四）年に焼失し、のちに早雲寺以天宗清によって再興されたことは、既に『小田原市史』に関連史料が網羅されており、周知の事象である。本稿では、建長寺と関わりの深い玉隠英瑠が、宗瑞は南浦紹明を尊重したとあって賞賛したという事実の意味を考えた。

宗瑞は以天宗清を介して、大徳寺僧衆が建長寺天源庵の再興に腐心しているということを知ったのだろう。永正一三年に相模を軍事征服した宗瑞・氏綱は、相模および関東の首府にあたる鎌倉の宗教勢力を味方につける必要性を認識していた時期だった。この状況の下で、宗瑞が天源庵の再興に対する奉加を表明し、これを歓迎した玉隠が宗瑞を建長寺僧南浦紹明を尊重する外護者として賞賛したのであろう、という仮説を示した。

代替わりの寺社修造事業という現象は、北条氏歴代のうちでも特に氏綱に顕著である。修造事業の範囲も、相模湾域の各地に広がる。近年、明応年間に相模トラフを震源とする関東大震災クラスの大地震があったという仮説が提起されている。建長寺天源庵自体の火災・焼失はこの震災とは別の年の事件だが、氏綱の寺社修造には、震災被害を受けたまま戦乱のなかで放置されていた寺社の修造という意味があったのだろうと考えることもできる。

註

- (1) 早雲寺の概要は岩崎宗純氏「早雲寺の創建と大徳寺関東龍泉派」一九九八年、『小田原市史通史編原始・古代・中世』七二七～七二四頁による。
- (2) 同企画の展示図録『開基五百年記念 早雲寺―戦国大名北条氏の遺産と系譜―』二〇二一年に拙稿「早雲庵伊勢宗瑞と箱根湯本早雲寺」を掲載していただいた。
- (3) 「佳境集」『小田原市史 史料篇 原始・古代・中世Ⅰ』（以下『小・史Ⅰ』と略記する）五四四頁、後掲史料一。
- (4) 以下、臨済宗大心派・大覚派の展開・僧侶の伝記については、竹貫元勝氏『新日本禅宗史』一九九九年禅文化研究所、玉村竹二氏『五山禅僧伝記集成』二〇〇三年思文閣出版、鈴木学術財団『大日本仏教全書』（以下『全書』と略記）所収『日本洞上聯燈録』『続日域洞上諸祖傳』『延寶伝燈録』による。
- (5) 柴屋軒宗長『東路の津登』『群書類従』第十八輯七七九～七八二頁、後掲史料二。
- (6) 『明叔録』『小田原市史 史料篇 原始・古代・中世Ⅰ』六八六頁、後掲史料三。
- (7) 『北条五代記』『改定史籍集覽第五冊』一九〇頁。
- (8) 『群書類従』第二十五輯五五〇～五五二頁。
- (9) 同右五五一頁、後掲史料六。
- (10) 「妙海寺文書」『静岡県史史料編7中世三』（以下『静・史7』と略称）七二九号。
- (11) 「早雲寺記録」『小・資Ⅰ』七二二頁、前注(2)『展示図録』一九二頁。

- (12) 金子浩之氏「宇佐美遺跡検出の津波堆積物と明応四年地震・津波の再評価」二〇一二年『伊東の今・昔』一〇号、同氏『戦国争乱と巨大津波』二〇一六年雄山閣、盛本昌広氏『温古集録』収録の龍華寺棟札写」二〇一五年『金沢文庫研究』三三五号、拙稿「伊勢宗瑞の小田原入部―明応年間の相模トラフ地震の観点から―」二〇二二年、学習院大学史学科編『新・歴史遊学』山川出版社。
- (13) 異本『塔寺八幡宮長帳』『小・史Ⅰ』五四三頁。
- (14) 前注(4) 玉村氏『五山禅僧伝記集成』一一一頁。
- (15) 前注(3)「佳境集」。
- (16) 奥野高広氏「伊勢宗瑞の素生」一九七九年『武蔵野』五七―二。
- (17) 前注(4) 竹貫氏『新日本禅宗史』第一章第二節「円爾弁円と蘭溪道隆」。
- (18) 前注(14)に同じ。
- (19) 以下、前注(17) 竹貫氏書第一章第四節「南浦紹明と高峰顕日」、前注(4) 玉村氏書五三五―五三八頁、前注(4)『延寶伝燈録』『全書』第六九卷一六四―一六八頁。
- (20) 前注(4) 玉村氏書五三七頁。
- (21) 前注(4) 竹貫氏書第二章「南北朝・室町期の禅僧」
- (22) 平野宗浄氏『一休和尚全集第一卷狂雲集』一九九七年春秋社。
- (23) 同右二七七頁。
- (24) 同右一〇頁。
- (25) 前注(5)『東路の津登』。
- (26) 前注(6)『明叔録』。
- (27) 『大日本史料第九編之九』三三三頁。
- (28) 今枝愛真氏「禅宗の発展」『静岡県史通史編2 中世』第二編第五章第一節五八一―五九〇頁、『日本洞上聯燈録』『全集』第七一巻一四頁、喜山性讚法嗣項。
- (29) 『続日域洞上諸祖傳』『全集』第七〇巻二七五頁。

- (30) 『続日域洞上諸祖傳』『全書』第七〇卷二四六頁・平凡社『日本歴史地名体系 岡山県の地名』八四四頁。
- (31) 以下『日本洞上聯燈録』『全集』第七一卷三五頁、石雲崇之性代禪師法嗣項。
- (32) 『今川記』『静・史7』一二六五号〜一二六七号。
- (33) 前注(28) 今枝稿五八六頁。
- (34) 以下『日本洞上聯燈録』『全集』第七一卷三三六頁。
- (35) 「修禪寺文書」『静・史7』二六三・二六四号
- (36) 『日本洞上聯燈録』『全集』第七一卷二四頁茂林之繁禪師法嗣項。
- (37) 以下、『静・史6』二六二八〜二六三六号
- (38) 「宗長手記」『群書類従』第一八輯二五九〜二六〇頁。
- (39) 『大乘院寺社雜事記』・同紙背文書『静・史6』二六一八・一九号。『補庵京華後集』『静・史6』二六四五号。
- (40) 『延寶伝燈録』『全書』第七〇卷二六〜二七頁。
- (41) 鶴崎裕雄氏「連歌師宗長」『静岡県史通史編2中世』第三編第五章第二節九四七〜九六三頁。
- (42) 以下、二木謙一氏「室町幕府弓馬故実家小笠原氏の成立」初出一九六九年、同著『中世武家儀礼の研究』一九八五年吉川弘文館に再録。同著一九八二〇四頁。
- (43) 『小田原編年録第一冊』一九七五年名著出版、三五頁。
- (44) 『長祿二年以来申次之記』『群書類従』第二輯二四九頁、『親長卿記』文明一九年四月一四日条。
- (45) 「箱根神社文書」『小・史1』三五六頁。
- (46) 『大日本古文書 蜷川家文書』五二三号。
- (47) 前注(42) 二木著書一九三頁。
- (48) 東京大学史料編纂所架蔵謄写本二〇一六・一三三三三二一、三五頁。
- (49) 『新訂増補国史大系尊卑分脉第三編』三四〇頁。
- (50) 前注(40) 『延寶伝燈録』『全書』第七〇卷二七頁。
- (51) 「築田家文書」『戦国遺文古河公方編』三四九号。

箱根湯本早雲寺の開山以天宗清と鎌倉五山建長寺(家永)

- (52) 以下『蔭涼軒日録』延徳二年九月三日・明応元年五月一六日・一七日・二八日条、『補庵京華外集 下』、『翰林胡蘆集 三』、内閣文庫所蔵『諸州古文書 二十四』天文一八年二月二八日今川義元判物（『静・史7』一四一・一六八・一六九・一七一〜一七三・一九二二号。前注（28）今枝氏稿。
- (53) 『京華外集』玉村竹二氏編『五山文学新集』第一卷八二五頁。
- (54) 『妙法寺記』『今川記』『静・史7』一八六〜一八八号。
- (55) 『静・史7』一九三号。
- (56) 前注（51）「築田家文書」。
- (57) 『静・史7』一六八・一六九・一七一〜一七三号
- (58) 『小・史1』五二七頁。
- (59) 前注（40）『延寶伝燈録』『金書』第七十卷三九頁。
- (60) 拙稿「甲斐・信濃における『戦国』状況の起点」二〇一三年『武田氏研究』四八号。
- (61) 前注（40）『延寶伝燈録』『全集』第七〇卷四〇頁。
- (62) 『大隆禪師行実』東大史料編纂所架蔵謄写本二〇一六―一九二。
- (63) 前注（11）に同じ。
- (64) 『静・史7』七六九号。
- (65) 『大日本史料第九編之十』一〇六頁、『龍寶山志』東大史料編纂所架蔵謄写本二〇一五―一六〇。
- (66) 「箱根神社棟札銘」『戦国遺文後北条氏編』五六号。
- (67) 「妙海寺文書」『静・史7』七二九号。
- (68) 『山梨県史資料編 6 中世 3 上』二二三頁、以下前注（12）拙稿。
- (69) 『宗祇終焉記』『群書類従』二十九輯、四四五頁。
- (70) 『静・史7』三七〇・三七一号。
- (71) 『小・史1』三三六号。
- (72) 『鎌倉九代後記』『小・史1』三四〇号。

- (73) 『鎌倉九代後記』『小・史Ⅰ』三四六号。
- (74) 前注(7)『北条五代記』『改定史籍集覽第五冊』一九〇頁。
- (75) 「茂原寺文書」『戦国遺文房総編』五二八号。
- (76) 『仏像伽藍記』『小・史Ⅰ』三四七号。
- (77) 「茂原寺文書」『戦国遺文房総編』五五〇号。
- (78) 以上、『宇津山記』『宗長手記』『宣胤卿記』『静・史7』六五四～六五八・六六二号。
- (79) 「円覚寺文書」『戦国遺文後北条氏編』三〇号。
- (80) 『群書類従』第二十五輯五五一頁。
- (81) 同右五五一頁、『快元僧都記』天文四年八月一六日、二三日、一〇月六日条。
- (82) 同右五五〇～五五一頁。
- (83) 同右五六八頁。
- (84) 「箱根神社文書」『戦国遺文後北条氏編』三七号。
- (85) 「箱根神社文書」同右五六号。